

乾	☰	巳	四月	五月	六月
姤	☴	午	五月	六月	七月
遯	☶	未	六月	七月	八月
否	☷	申	七月	八月	九月
觀	☶	酉	八月	九月	十月
剝	☶	戌	九月	十月	十一月

十二辰は北斗の斗柄(第五星より第七星に至る三星)の指すところにより、臨ならば建丑、泰ならば建寅等と称す。夏正に対し、殷正・周正は各々一か月を遯るもの、卦辞の「至于八月、有凶」の参考に資するために掲げた。尚、礼記月令の孟春、「天氣下降、地氣上騰」の「正義」に陰陽消息の理を縷説している。卦体として、また九二は剛中を以て上の六五に応があり、成卦の主となっている。その卦徳は兌説(☱・坤順、和説して順うは、民に臨み下に臨む卦として、「吉にして利しからざるなし」である。その卦象は坤地・兌沢、「沢の上」に地あり)の象で、地が一段低い沢に臨み、上より下に臨むことを示している。卦においては、下二陽が上進して漸く盛大であり、四陰に臨むを言う。尚、「臨」は「觀」の反卦である。

臨、元亨、利貞。至于八月有凶。

臨は、元いに亨る、貞しきに利し。八月に至り凶有り。

象曰、臨、剛浸而長、説而順、剛中而應。大亨以正、天之道也。至于八月有凶、消不久也。

象曰、澤上有地、臨。君子以教思无窮、容保民无疆。

象に曰く、臨は、剛浸くにして長じ、説んで順ひ、剛中にして應あり。大いに亨りて以て正しきは、天の道なり。「八月に至りて凶有り」とは、消すること久しからざるなり。象に曰く、澤の上に地有るは、臨なり。君子以て教へ思ふこと窮まりなく、民を容れ保んずること疆り無し。

通釈 「臨」は民に臨み事に臨んで大なるの卦、諸事、大いに亨通するが貞正を固守するがよし。八月、漸く盛大なる陽が消失するので、凶がある。

象伝 「臨」は、下より二剛が漸く上進して盛大になり、和説して上に従い、剛中(九二)で上に正応(六五)がある。諸事、大いに亨通して貞正であるのは、天道に合するものである。「八月に至りて凶有り」というのは、「臨」に漸く盛大になった二陽が、八月の遯に至って全く消失するので、消すること久しからずと戒めたものである。

大象 沢の上に地がある象が、臨である。上が下に親臨し、地がよく含容するの象で、君子はこの象に法り、民を教導し自ら思い省みること窮まりなく、民を包容し保護すること限りなきものである。

語釈 ○「臨、元亨、利貞」は、「のぞむ(泄)。大を以て小に臨み、上から下に臨むの義、みな大・上のこと、故に大なり(序卦)という。民に臨み事に臨むを意味すると共に、進んで物に逼るの意を持つ。「元亨、利貞」は、元は大なり、亨は通なり、利は宜しきなり、貞は正にして固なり(本義)で、乾の卦辞に同じ。「元亨」はその占、「利貞」はその戒を示すの辞。十二消息卦では建丑の月、夏正では十二月、周正では二月に配される。○「至于八月有凶」「八月」は、建子復卦一陽の月より、建未遯卦二陰の月に至る、臨の二陽が消し、二陰が息する遯である。遯は十二消息卦では周正八月に配されるが故に八月という。一説に臨の反卦の觀とする。十二消息卦では「觀」は夏正八月に配される。【補説(一)】参照。「有凶」は臨の二陽が消するによって言う。臨の二陽息して漸く盛大ならんとするときに当たって、その消することを説き、戒辞としたもの。

○「剛浸而長、説而順、剛中而応」卦体・卦徳を以て卦の名義を釈す。「剛」は初九・九二、「浸」は、「ようやく(漸)、卦体の下二陽が漸く盛大なるを言う。「臨」は、兌説(☱・地順で、その卦徳は和説して順い、人心和附するの義。「剛中」は九二、「応」は六五である。○「大亨以正、天之道也」。「大亨」は、二陽が上進して漸く盛大となり、上四陰に逼り臨むによる。諸事大いに亨通する。「以正」は、九二の剛中が六五の柔中に正応があるによる。「程伝」に「浸は漸なり、二陽の下に長じて漸く進むなり。兌を下にし坤を上にするは、和説して順ふなり。剛、中道を得て応助あり、これを以て能く大いに亨りて正しきを得、天の道に合す。剛正にして和順するは天の道なり。化育の功の息(☱)まざる所以は、剛正和順のみ。これを以て人に臨み事に臨み、天下に臨みて、大いに亨りて正を得ずといふことなきなり。兌を説(☱)となす、説は乃ち和なり」と説いている。○「消不久也」消は、陽が消すること、臨の二陽が、遯に至って全く